

# ABIC 国際社会貢献センター

# Information Letter

No. 41 2014年11月

**政府機関関連への協力** 内閣府の「歩こうアメリカ、語ろうニッポン」プログラムに参加して…………… 2

**教育** 日本貿易会／ABIC／関西学院大学／青山学院大学共催プロジェクト…………… 3

経済産業省第4回「キャリア教育アワード」奨励賞を受賞  
～豊富な国際ビジネス経験に基づいた大学・大学院講座～…………… 5

小学生に「サンバ」を教える…………… 6

**留学生支援** ABICの「日本語教師養成講座」を受けて…………… 7

兵庫国際交流会館での活動…………… 8

東京国際交流会館での活動…………… 9

**エッセー** カンツォーネの故郷を訪ねて…………… 10

**事務局だより** ABIC会員懇親会を開催…………… 4

ブラジリアン・インターナショナル・プレスアワード2014年受賞!!…………… 11

会員の種類…………… 12

法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数…………… 12

賛助会員入会のお願い…………… 12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)  
Action for a Better International Community

<http://www.abic.or.jp>

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1  
世界貿易センタービル23階  
Tel : 03-3435-5973 Fax : 03-3435-5970  
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】  
〒541-0053 大阪市中央区本町4-4-24 住友生命本町第2ビル9階  
Tel & Fax : 06-6226-7955  
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

## 政府機関関連への協力

内閣府の「歩こうアメリカ、語ろうニッポン」プログラム<sup>(注)</sup>に参加して

中小企業診断士 はらだ じゅん 原田 純

標題のプログラムの第2グループとして渡米するという経験をさせていただいたので、御礼の意味を込めて簡単に報告させていただきたい。

2014年4月ABICからのメールで募集を知り、応募しようと思った。取り掛かってみると1,500語の英文エッセーのハードルが高かったので、いったんは断念したが、結局何とか作成し応募した。1969年にホームステイをして以来、私の人生に大きな影響を与えた国の今をこの目で見かけたからである。

5月12日(月)に面接があり、5月19日(月)から3日にわたる講習を電通本社で受けた。私が通常では直接お話を聞きする機会のない方ばかりからの講義だったので、これだけでも大きな財産となった。

さらに6月15日出発の第2グループに決まってからは、団長の島田晴雄先生(千葉商科大学学長)の事務所3日間にわたってお話を伺った。これも先生のお考えが分かり、メンバー間の理解も深まって非常に良い機会だったといえる。他のメンバーお二人もABICのメンバーであることが分かり心強く感じた。

6月15日(日)に東京を発ち、ケンタッキー州のレキシントンへ到着した。到着したその日の夕食会をはじめとして、毎日会合が5-6ほど組まれていた。日米協会を中心とする集まり、地元の大学教授との意見交換などはどちらも単なる儀礼を超えた実のある意見のやり取りができた。

6月18日(水)にペンシルベニア州のフィラデルフィアへ移動した。こちらはレキシントンに比べるとはるかに都会だったが、日程はレキシントン同様に忙しいもので、多くのミーティングによる意見交換を行った。したがって間に移動が入ったとはいえかなりハードな6日間となった。

ABICのお二人は私より年齢が上にもかかわらず、日程

が進むにつれてますます元気になられた。これは自分には予想外のことであり、またこれから自分が同年代になってもパワフルにやれるのだという大きな励みになった。

島田先生の隣にいる機会が多かったのだが、アメリカの大学教授や学生と討論をしているうちに、議論に夢中になれるのがよくわかった。常に相手の意見を全身で受け止められ、全身で返そうという姿勢なのである。これには頭が下がった。自分は場合によっては適当に受け流そうと考えてしまうことがあるのだが、島田先生はそうではなかった。こうした姿勢が国を超えて多くの方の信頼を勝ち得ることにつながっているのである。これは大きな気付きであった。

振り返ってみると各領事館や日米協会の皆さま方の努力の上で、親日派の方を中心に意見を交換したということになるのかもしれないが、こうした試みは今後も続けていく価値があることは間違いない。

初めは気楽な気持ちで参加したこのプログラムだったが、終わってみると20年分の動機付けを頂いた。心から感謝している。機会があったらまたやりたいぐらいである。私はこれから80歳まで20年は仕事するつもりだが、中小企業診断士としての視点はどうしても診断対象の企業だけに向きがちだ。それをもう少し広げて国とか世界とかの視点を加えることにより、対象企業についても立体的に見ることができることが分かった。気付きを大切にこれから20年やっていこうと思う。ABICを含め関係者の皆さま本当にありがとうございました。

(注) 米国の各都市において、地元の人々に対して、日本の強み・魅力等の発信を通じ、日本の理解促進を図ることを目的として、一般から公募した人材を内閣府が選定し、全米各地へ派遣する事業。



ケンタッキー大学にて(左から4人目が筆者)



現地有識者等を招いたレセプション

## 教育

## 日本貿易会／ABIC／関西学院大学／ 青山学院大学共催プロジェクト

### 高校生国際交流の集い

日本貿易会／国際社会貢献センター（ABIC）は関西学院大学と第8回（7月24－25日）、青山学院大学と第7回（7月26日）の高大連携プログラム「高校生国際交流の集い」を開催した。

この催しは2007年度からABICと関西学院大学、ならびに青山学院大学の共催で関西と関東でスタート。日本と海外の高校生の交流を大学生が企画から運営まで中心的役割を担いつつリード、大学教授、社会人が側面支援を行う産学協同の試みとし、互いに異文化理解を深めることを目的とした高大連携教育の一環として、日本と米州、欧州、アジア・大洋州諸国の高校生が寝食を共にして語り合う国際交流の場を提供している。

関西は民間国際教育交流団体のAFS日本協会大阪支部、日本国際交流振興会（JFIE）、および神戸龍谷高等学校が、また、関東はAFS日本協会東京支部が協力団体として参加した。

### 関西（7月24－25日）

回を重ねて第8回となる「高校生国際交流の集い2014」を関西学院大学上ヶ原キャンパスを会場に“The First Step”（ココから未来へ）というテーマで2日間にわたり開催した。

参加高校生は、兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立国際高等学校、大阪府立箕面高等学校、大阪府立千里高等学校、私立啓明学院高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部から計31人。留学生は、米国、カナダ、コスタリカ、アルゼンチン、イタリア、フィンランド、スイス、ドイツ、ブルガリア、タイ、モンゴル、豪州、ニュージーランドから合計34人が参加した。この行事を推進する関西学院大学生は、よりきめ細かい対応を目指し、2014年は33人が各学部から参加し、高校生、留学生、大学生の総数が98人となり、過去最大の規模となった。

行事初日は、関西学院大学研究推進社会連携機構社会連携センター長、木本教授の開会挨拶に続き、グローバル関西学院院長が、関学創立125周年の歴史にも言及し、高校生、留学生に国際理解の重要さと、心構えを分かりやすく英語で語りかけた。次いで高校生、留学生には、グループディスカッションの趣旨が映像を活用し、説明された。続く昼食、体育館でのレクリエーションを通じ、留学生と高校生はすぐに打ち解け合った。午後からは7つのグループに分かれ、参加者が異文化理解を互いに深めるということを最終目標とするディスカッションが開始された。

大学生スタッフは、高校生に対してテーマにつながる事前課題を出しておくと共に、英語表現の手引メモを準備する等の工夫を行い、限られた時間内で高校生と留学生がコミュニケーションを取りやすくするための配慮が見られた。大学生スタッフ自身は、次年度の大学生スタッフに、行事推進上の反省点、改善点等を引き継いでゆく姿勢が見られる。一方、高校生としてこの行事に参加し、関学に入学後、参加者同士でネットワークをつくり、今度は学生スタッフとしてこの行事の推進に積極的に関わるケースも定着してきており、好ましい循環が生じている。その意味で、本行事も高校生の国際理解教育の側面に加え、大学生の自己啓発効果も現れてきているといえる。

2日目は、オリジナルうちわの製作を楽しんだ後、グループディスカッションを続け、まとめた結果を高校生と留学生が協力し合って映像を使用したり、あるいは寸劇を挟んだりして、プレゼンテーションを行った。参加高校教諭、留学生を本行事に派遣した機関からの来賓、ABICも加わり、審査の結果、優秀賞および準優秀賞グループを選定、表彰した。参加者の中で各プレゼンテーションを評価し合う試みも加えられた。SNS世代らしく「いいね！」マークを多く獲得したグループに拍手が送られた。関ABIC事務局長による閉会挨拶の後、木本教授より参加高校生、留学生に修了証が授与され、参加者全員が名残惜しそうに歓談した後、家路に就いた。

（関西デスクコーディネーター たちばな ひろし 橘 弘志）



プレゼンテーション



参加者全員で

## 関東（7月26日）

震災の影響によりやむなく中止となった2011年を除き、2007年より毎年実施されてきており、例年1泊2日で行ってきたが、2014年は会場の都合により1日のみの開催となった。今回はABIC CAMP 2014「Stars～Shining in our own way」と銘打ち、参加者がスターのごとく輝き、はつらつと楽しく本キャンプを経験してほしいとの思いを込めたものであった。

参加した高校生は、青山学院高等部、横浜市立横浜商業高等学校、横須賀学院高等学校、神奈川県立相模原高等学校から20人、米国、カナダ、ベルギー、イタリア、ブルガリア、トルコから来日中のAFS交換留学高校生14人の計34人。リード役はAFSボランティア大学生、青山学院大学生の計11人。日本側高校生の中には英語は苦手だが、外国の高校生との交流を希望する生徒もあり、またAFS交換留学高校生は日本語研修が来日目的ということでもあるので、交流の場では英語のみならず日本語も可としている。

例年、開会の場では特に日本側高校生に緊張の色がうかがえるが、今回も大学生スタッフの巧みなリードもあって最初から打ち解けたムードとなり、交流の場にふさわしい雰囲気ですスタートした。その流れでゲームを楽しみ、お互いにリラックスしたところで、全体ワークを行い、引き続き皆で昼食を楽しんだ後、グループディスカッションを行った。



ゲームで一挙に打ち解ける高校生

最終プログラムとして例年は各グループによるディスカッションの発表会が行われてきたが、今回は参加者一人一人によるスピーチコンテストが行われた。各人のスピーチではさまざまな感想が述べられたが、短い間にもかかわらず異文化に接することができ貴重な体験となったこと、英語が苦手だったけれど思い切って参加して将来に一步踏み出せた感じが持ったこと、これを機に将来留学を考えたい、さらには本キャンプに2度目の参加者は、前は英語ができず引込んでいたので今回はリベンジを期し参加し大いに楽しめたこと等々、今回ABICキャンプが目指した各人が光り輝き生き生きとした活動を感じさせるものであった。

外国人留学生も日本の高校生との密度の濃い交流により、日本をより知ることができ、日本に対する愛着も深まったことと思われる。

最後にABICの齊藤秀久理事長および青山学院大学の増田捷紘教授のスピーチと参加者全員の記念撮影で本イベントの幕を閉じた。

今回の具体的な企画から実行面でリードし、本キャンプを裏切るものに導いた大学生スタッフの事後の感想・提案も踏まえ、2015年度がさらに充実した国際交流の集いとなるよう努めていきたい。

(小中高校国際理解教育コーディネーター  
川俣 二郎、高塚 謙次)



スピーチコンテスト風景

## 事務局だより

### ABIC会員懇親会を開催

2014年9月19日（金）18時～19時半、ホテル日航東京（台場）地中海料理「オーシャン ダイニング」において会員懇親会を開催しました。正会員、活動会員ならびに日本貿易会関係者など約140人の参加を得て、小林会長の開会挨拶に続き、齊藤理事長の活動報告および乾杯発声の後、活発な交流、懇親が行われ、盛会のうちに終了しました。



小林会長開会挨拶



齊藤理事長乾杯発声

## 教育

## 経済産業省第4回「キャリア教育アワード」奨励賞を受賞 ～豊富な国際ビジネス経験に基づいた大学・大学院講座～

### 大学講座グループ

今般、ABICは経済産業省（経産省）による2013年度の「第4回キャリア教育アワード奨励賞（中小企業の部）」を受賞した。経産省では、子どもや若者たちに対して、仕事のやりがいや学校での学びと実社会とのつながりを伝える「キャリア教育」を推進している。「キャリア教育アワード」とは、企業や経済団体等による教育支援の取り組みを奨励・普及するため2010年度に創設された表彰制度である。経産省ホームページには、ABICの受賞理由が以下のように記載されている。

「○大学とビジネス界をつなぎ、実際に海外で業務に携わった経験を基に行われる講師の講演、講義は、内にこもりがちといわれる学生に広い視野を提供する取り組みとして、また、グローバル人材育成という視点で極めて価値がある。

○グローバル化を身近なものとして捉える機会を効果的に提供しており、国際貢献等、21世紀型スキルが求められる現在の教育に与える意義は大きい。

○非常勤講師によるオムニバス方式が中心であるが、講座ごとに担当コーディネーターを置くことで、学生の関心を引く講義内容の工夫、学校とも十分調整され、教育の面での効果も得られるよう大学のニーズに応じた柔軟な対応がなされている。」

今回の受賞は、まさに2001年以降、ABICが国際社会貢献としての国際理解教育を実施してきた事業が評価されたものである。

受賞後、受賞団体のフォローアップとして経産省産業人材政策室、および関東経済産業局の担当による教育現場の視察が行われ、青山学院大学のABIC活動会員による授業の聴講が実施された。その後、青山学院大学側から同大学副学長以下関係者、ABICからは事務局長以下大学講座担当コーディネーター等の三者間で意見交換会が行われた。

意見交換会では、経産省側からキャリア教育の取り組みを中心にヒアリングが行われ、ABICからこれまでの講義事例などを基に回答した。特に教育効果を高める工夫として、新講師のための研修会、英語による講義手法などの勉強会実施、学生へのアンケート実施によるニーズの掘り起こし、講師間情報交換会などを行っていることを説明した。また、講義時には、講師の海外における失敗談や成功談も盛り込んでいること、学生の興味、関心を持たせる講義内容にすべく創意工夫を凝らしていることなどを報告した。

一方、ABICから大学への要望事項として、講師の年齢制限の緩和、オムニバス方式における大学との一括業務委託契約締結を申し入れ、さらに、大学のカリキュラム改訂手続きがタイムリーに実施できない現状などを訴えた。最後にABICより経産省に対して、せっかくの表彰を、もっと社会にPRしていただき、教育関係者にも認知されるべく支援いただくようお願いするとともに、ABICとして、さらなるキャリア教育への取り組みに協力していく旨を表明した。



青山学院大学「国際ビジネス入門」ヨーロッパ市場編を講義する活動会員の石田新一氏

## 教育

## 小学生に「サンバ」を教える

たかはし よしき  
高橋 美樹 (元丸紅)

ABICより国際理解教室の講師のお話を頂いた。内容は日本橋にある中央区立阪本小学校の3年生から6年生までの生徒約85人を対象に「サンバ」を教えてほしいというものであった。

授業実施予定日が2014年5月で、その直後の6月中旬からブラジルでサッカーの世界カップ大会が開催されるため、ブラジルへの関心が盛り上がっていた時期。子供たちにサンバのリズムを体験してもらいブラジルへの理解を増やしてほしい、との趣旨であった。

私は以前仕事の関係で4年間ブラジルのリオデジャネイロに駐在し、その間サンバに深く親しみ、リオのカーニバルにも何度も参加していた。その経験を生かして日本の子供たちにブラジルとサンバを知ってもらおう好機と考えて、このお話を受けさせていただくこととした。

日本でサンバは著しく誤解されていることを私は残念に思っていたので、この機会に日本の子供たちに本物のサンバの美しさやブラジルの素晴らしさを伝えたいと考えた。また、ブラジルは大の親日国であり、多くの日系移民の存在、サッカーの分野ではジーコをはじめ多くのブラジル人選手が日本で活躍して日本サッカーのレベルアップに貢献したこと、そして、日本人はサンバ・ボサノバが大好きで、世界でも最もブラジル音楽が好き国民であること、なども理解してほしいと考えた。

授業に当たっての準備には下記工夫をした。

- 1) パワーポイントを使って地図・写真・動画・音楽を多用することにより、視覚と聴覚による体感を狙った。

- 2) 目前に迫ったサッカーワールドカップとの関連テーマを盛り込み児童の興味を喚起。

- 3) サンバダンスのワークショップでは基本のステップの習得に限定し、難しいステップは盛り込まなかった。当日の授業は小学校の体育館で行った。授業の内容は、①ブラジルとワールドカップについて、②リオデジャネイロとサンバ、カーニバルについて、③実際にサンバのステップを体験するサンバ・ワークショップ、の3部構成であった。時間の制限もあり全体の時間配分が難しかったが、関係者皆さまのご協力を得て無事に授業を行うことができた。

授業後の子供たちの感想を見ると、「サンバのダンスは最初は難しかったが、慣れてきたら楽になった」とか「楽しかった」との意見が多かったので安心した。個人差はあれ、実際にサンバのステップを体験したことが一番強烈な思い出となったようであった。また、ブラジルやリオデジャネイロについても使用した音楽や現地の写真、それにカーニバルの動画等を通して子供たちにその素晴らしさを感じてもらうことができた。

今後2016年にはリオデジャネイロでオリンピックが開催される。今回の授業を通して得られたブラジルとサンバに関する子供たちの関心と理解が再び役に立つことを願っている。また、この授業は私にとっても素晴らしい貴重な経験となった。

かかる貴重な機会をあっせんしご指導いただいたABIC関係各位にあらためて感謝したい。



授業風景「リオとサンバについて」



授業風景「サンバステップのワークショップ」

## ABICの「日本語教師養成講座」を受けて

わし ず 驚頭 さぶろう 三郎 (元 日商岩井)

私は2006年10月、計4回通算25年にわたるブラジル駐在を終えて日本に帰国した。帰国当時、在日ブラジル人は30万人を超え、日本語の理解不足・不十分な習得により、その子弟の教育が問題になっていた。それで、在日ブラジル人に日本語を教えられれば、それはブラジル・ブラジル人へのある種の恩返しになると考えた。

「国際社会貢献センター」(ABIC)に日本語教師養成講座があることを知り、2007年10月より2008年3月まで半年間の講習を受けた。受講者は計8人(男性6人、女性2人)で全員無事卒業した。しかし、受講を終えてみると、私の周りにはブラジル人相手の授業の機会はなく、私の居住している街の外国人支援グループが、社会貢献の一環として行っている近隣外国人向けの日本語教室があり、その授業の一部を受け持った。この授業は初級から上級までの週2回、対象者は中国人、韓国人、インド人、その他ベトナム人、インドネシア人、オーストラリア人等で日本人男性と結婚した主婦もいる。また、インド人やインドネシア人は日本の提携先企業への研修生として派遣されているケースもある。また、卒業してから約1年後、お台場にある国際交流館の留学生およびその家族への日本語授業を担当する機会(週1回)を頂き、現在も続けている。

2008年3月に卒業した8人は、現在も「三期会」(養成講座の三期に当たる)という名前で、春・秋の年2回懇親を目的とした交流を続けている。幹事を輪番制として、毎回昼食会と簡単な訪問先を選定する。今までに、初詣を兼ねた鎌倉八幡宮参拝、等々力渓谷散策、柴又帝釈天、キンビール工場見学等を実施している。

三期生の卒業後の主な活動を述べてみたい。

・U氏(総合商社OB、中国駐在経験)は、ABICの紹介で東京都下T市の教育センターから、「現地語(中国語)で日本語を指導する」、「週2回、指導回数30回、期間約4ヵ月」という条件で、市立の小・中学校に派遣された。その経験から、①小学2年生は、五十音・発音等の基礎が主となる。②小学高学年の場合は、国語の授業で小説などが出てくるので、日本の文化の説明が必要となってくる。③中学生になると、学校生活と授業に必要とされる日本語の語彙が多くなるので、指導は非常に難しくなる。同氏の経験では、学習者の興味や得意科目を見つけて、そこを突破口に指導していけば、よりスムーズな指導が期待でき、本人の理解度も向上する、との考えである。

・Mさん(主婦)日本語教師のボランティア活動をする機



「三期会」で訪れた世田谷の九品仏・浄真寺で筆者(前列中央)

会はいまだないが、教師養成講座で学んだことは仕事に大変役に立ったという。職場で中国人に仕事の引き継ぎをした際、①発音ははっきり明瞭にすること。②難しい言葉は使わないこと。③日本人が当たり前と思っていることを相手もそうだと決して思わないこと、等ABICの講座で学んだことを思い出しながら指導し、引き継ぎが円滑にでき、相手からも大変感謝されたという。身近に外国人と接する機会が増えている昨今、ABICの講座で学んだことはMさんにとって大切なスキルになっているという。

・U氏(総合商社OB、海外駐在経験)養成講座卒業後、現在の神奈川県Y市の国際交流協会勤務に至るまでの5年強の期間、多くの外国人に初級から中級までの日本語を教える機会があった。お台場の国際交流館では3年ほど、初級から中級まで教えた。その間、横浜市内の居住地域で、ボランティアとして、フィリピン人や米国人にもレッスンをした。特に、米国人の場合は、年配者で目も不自由だったので、ジェスチャーや絵、そして字を教えずに、日本語を教えるということがいかに大変か、苦勞もしたが大変勉強にもなったという。現在は交流協会の仕事をしているが、退任後はまた直接日本語を教える活動をしたいという。

・T氏(総合商社OB、海外駐在経験)養成講座受講後は、特に日本語を直接教える機会はなかった。しかし、ベトナム、台湾で仕事をやる機会があり、通訳以外に、現地採用の若いスタッフに業務内容を説明する役割を担当。現地スタッフは、日本語はかなり堪能だが、さらに日本語の表現力の向上を図るに当たっては、要点をしっかりと押さえ、メ

リハリをつけて表現すること。同時に、日本語の礼儀正しさや婉曲<sup>えんきよく</sup>表現は、相手とのスムーズなコミュニケーションに有益であることなど、講座で学んだことは大変役に立ったという。また、相手との相互理解には、講座で学んだ日本の文化や伝統・習慣などへの関心を深めることも重要と考えるという。

・M氏（総合商社OB、海外駐在経験）養成講座卒業後、しばらく日本語を教える機会がなかったが、ある縁で、東京大学国際センターで、同大学院に留学のため来日したばかりの学生に週1回2時間の日本語を4年間教えた。帰国の際、記念に製本された英文の卒業論文をもらった。その前文にM氏のことが一言触れられていたことがうれしく、印象に残っているという。

・Y氏（総合商社OB、海外駐在経験）ABIC講座修了後、日本語を教える機会はありませんでしたが、調布市の国際交流協会の日本語講座で1年間、ネパールから来日した中年男性3人に日常会話主体に授業をした。彼らはネパール料

理店の従業員で、日常会話ができれば十分ということだった。

われわれ三期生は、故吉田裕先生から有益なたくさんのごことを学んだ。あらためて感謝の気持ちを表したいと思います。

世界と日本のグローバル化が進む今、言語、宗教、習慣等が異なる人々との共生は避けて通れない。また、日本の少子化が進む中で、外国人が日本語を学ぶ機会とニーズはますます増大する。異文化共生には、お互いに理解し合うことが不可欠であり、そのためには言葉が重要であることは論をまたない。ABICには異文化を体験した多くの会員がいる。日本社会しか知らないで、日本語で日本語を教える教師では、対応が難しい場面も多くあろう。これからもABIC実践日本語教師へのニーズはますます増大すると思われる。また、さらに若い活動会員が日本語教師として活躍・貢献することを期待したい。

## 留学生支援

### 兵庫国際交流会館での活動

#### 新入館者WELCOMEバザーに初めて参加

10月8日（水）の新入生WELCOME PARTYに続いて11日（土）、新入館者歓迎バザーが開催され、ABICとして初めて参加した。2014年の新入館者69人をはじめ総勢161人の入館者と、外部からの来場者を加えて約200人がバザーに参加し、ABICの会員をはじめ支援企業ならびにその社員・ご家族、および日本貿易会役職員の方々から広範囲にわたる商品を54箱ご寄贈いただき、4万5,000円の売り上げを得ることができた。バザー売上金は同館の留学生支援活動資金として提供された。

ウガンダ、ルアンダ等アフリカ諸国からの新入生も多く、

日本へ来たばかりの学生にとり皆さま方から寄贈された衣料、各種生活必需品および食器・料理道具等々は必需品であり、ほぼ払底するほどで、関係者からも来季も是非開催してほしいとの要望があるなど極めて好評であった。

関西デスクでは、今回のバザーを手始めに広範な留学生支援を遂行いたしたく、第2弾として日本語教室・武道・華道等の企画を進めており、会員の皆さま方の一層のご協力をご支援をお願い申し上げます。

（関西デスクコーディネーター）



## 東京国際交流館での活動

### 2014年国際交流フェスティバル

8月16日（土）にABICの留学生支援活動の拠点である東京国際交流館で国際交流フェスティバルが開催された。当日は典型的な夏日であったが、3,500人を超える来場者を迎えて、各国の自慢料理コーナー、福島物産品販売、923形ミニ新幹線の試乗、「ロボカーポリー」プレイランド、国際のだ自慢大会、桂かい枝の英語落語上演など盛りだくさんのプログラムが続いた。

ABICは月例日本文化教室講師の方々のご協力の下、茶道、華道、書道の体験教室と着付け指導を行い500人を超える参加者に日本の伝統美に触れる機会を提供した。

夕凧とともに始まったのは恒例の盆踊りで、江東区民の皆さんのご指導の下、交流館館長、留学生、ABIC会員等が夏の夜のひと時を満喫した。



### 秋の新入館者歓迎バザー

10月18日（土）にお台場にある東京国際交流館では、恒例の留学生支援バザー（秋季）が開催された。今回は第26回目の開催であり、同交流館が創立以来14年間継続して実施している催事である。この東京におけるバザーに1週間先立ち、神戸市中央区にある兵庫国際交流会館においても第1回バザーが開催された。これは上記両交流館を所有運営している日本学生支援機構からの要請に応えたものである。

会場は商品選択と会計の効率性から、衣料品と食器・台所用品の2会場に分けて行われた。

また、バザーの開始時間を1時間繰り上げ、留学生には

時間をかけ安価で良質な商品を選び日本での生活に備えてもらうことにした。ABICの会員をはじめ支援企業ならびにその社員・ご家族、および日本貿易会役職員の方々から寄贈いただいた350箱で、23万円の売り上げを得ることができ、売上金は従来通り留学生支援活動資金として提供された。

今回はバザーに加え茶道、書道、着付の体験教室も実施し、体験教室やバザー会場のサポート役として定例文化教室の講師のほか日本語講師やABICボランティアチームの方々のご協力をいただいた。

（留学生支援担当コーディネーター）



エッセー

## カンツォーネの故郷を訪ねて

くわがた いさお  
鍛形 熏 (留学生支援コーディネーター、元 伊藤忠商事)

遙か昔私が受験生の頃、ラジオから流れる受験講座の合間に、実家に古くからあったレコードをよく聴いたことがあった。レコードといっても今では見られない78回転の黒色のSPレコードで、iPod、CD、LP等と比べると音質、演奏時間共に劣り、針音はするし3分ほどで終わってしまう代物であった。それを演奏する機械も電蓄（電気蓄音機）といい小型の冷蔵庫ほどの大きさのものであった。重たいSPレコードのコレクションには、レハールの「金と銀」や「メリーウイドウ」等オペレッタが多かったが、その中にベニヤミーノ・ジーリが唄う「Le rondini al nido (巣に帰るつばめ)」というカンツォーネがあった。レコードジャケットには、「つばめとは過ぎ去りし恋にして、季節が巡れども戻るをあたわず。ジーリ氏の熱唱を賞賛すべし」というような内容が書かれてあった記憶がある。当時、この歌の内容はこれしかわからず、受験英語に忙しい身でイタリア語の翻訳までは手が回らなかったが、この曲のゆったりと流れるようなメロディー、フルートで表現したツバメのさえずり、甘く訴えるようなバイオリンの音色を聞けば、十分に歌のテーマを想像できる曲であった。

幾たびか季節が巡り、大学での第2外国語の選択は躊躇なくイタリア語を選んだのも、受験時代に聴いたあのカンツォーネの意味を知りたいという単純な動機であったと思われる。基礎文法もそこそこに、早速手がけたのは「巣に帰るつばめ」の訳詞である。

高き塔<sup>の庇</sup>に、今年もツバメが帰り来る、  
遥かなる海山を、ものともせず、何時もの季節に。  
されど、愛は過ぎ去りて、帰ることなし 我が胸に。

夕暮れの、黄昏の中、春が忍び寄り、  
ツバメは喜びに溢れ、家路を急ぐ。

我はただ一人、帰りこぬ人を待ち、夕闇が忍び寄り。

再び星が巡り私は海外勤務となり、憧れの地イタリアの「カンツォーネ紀行」に出かける機会が訪れた。直接のテーマは、その当時流行し始めた「ケ・サラ」の舞台と思われる「パエーゼ(丘の上の小さな古い町)」であった。(岩谷時子氏訳詩)

平和で美しい国、信じあえる人々  
だけど明日はどうなることやら  
だれも分かりはしないさ

静かでゆったりとした時が流れる故郷は、子供や老人にはかけがえのない棲家だが、冒険や夢を抱く若者にとっては、倦怠とけだるさだけの場所に見える。今

日も一人町を離れ明日もまた誰か都会へ旅立っていく。日本にもある過疎の町。

多くの日本の村や町は山や里山に囲まれた平地にあるためか、異郷や都会への憧れは「山(丘)を越える」という動作や言葉に象徴されているようである。

童謡「叱られて」の中の歌詞には「二人のお里はあの山を越えてあなたの花の村…」

歌謡曲「丘を越えて」には「丘を越えて行こよ、真澄の空はほがらかに晴れて…」

山の向こうには現実の厳しさとは異なるやさしさと希望があるという発想である。

一方海賊や疫病から逃れるために中世の南欧の村や町は丘(山)の上であり、そのために鉄道や幹線道路から外れ、昔ながらの生活が続いている村や町パエーゼ(国=故郷)は離れたい寝床のようなものなのであろう。パエーゼの温かみから出て厳しい現実の待つ都会に挑む若者たちの心情を「ケ・サラ(=なんとかなさ)」という言葉で表現されている。

このような場面を求めて私が訪れたのはトスカーナ地方の町や村であった。村や町の広場には何か変化を求めるような眼差しの、人懐っこい若者たちが所在なくたむろしていた。

7月の日差しを避けながら石畳の辻を歩いていると、どこからかラジオ(と思われる)の音楽が聞こえてきた。♪Sotto la gronda della torre antica♪(古い塔の庇の下に…)「あっ!あの曲だ!ディ・ステーファ

ノかな?タリアビーニかな?」「ケ・サラ」の背景探しに夢中になっていて「巣にかえるツバメ」のことをすっかり忘れていた私に、この唄は強力な存在感を与えた。テノールの朗々とした声が石畳や通りの建物に響き、しばらく呆然として聞き入っていた。

歌声にまじり昼食の準備をする皿や食器の音、子供たちの叫び声、残念ながら7月になったためかツバメの飛来は見られなかったものの、私はまさにこの曲が生まれた場所に今立っているような気持ちになった。ラジオの次の曲は、メロディーも歌詞もあまり興味を



引くものでなかったため、急に空腹を覚えた。

「ケ・サラ」と「巣に帰るツバメ」は作曲された年代が30年以上も離れているが、なにか相通ずるものがある。「変化を求めて町を出て行く若者たち」「その帰りを待ちわびる親や恋人たち」まさに一対のドラマのようである。このドラマの状況は他のカンツォーネ「勿忘草」も同じで、やはり町を出て行った者をツバメにたとえている。

寒き我が町より ツバメは飛び去って行く。

スマレの春を待たず 別れの言葉もなく。

忘れないでおくれ 私のことを

私の胸には 何時も君の帰る巣があるのだから…  
後年、「ニューシネマ・パラダイス」という名画が上映されたが、この映画もまた故郷を飛び立った主人公トト（サルバトーレ）と故郷で待つ母親、そして父親代わりであった映写技師のドラマだった。

イタリア人の美的感覚の凄さは、切ない感情を表現するのに、短調（マイナー）や雨や霧、夜などを用いずに、長調（例、Cメジャー）や澄み渡った青空、明るい表情でそれを表現してしまうことである。この映画の作曲家エンニオ・モリコーネも、さらっと水や風が通り過ぎるような旋律で表現している。さりげなく明るい音楽や上演者の表情がかえって、研ぎ澄まされた透明感を醸し出していた。モーツアルトの音楽もこの透明感で構成されており、この偉大な音楽家も透明感を幼少の頃のイタリア旅行で感得したものではないかと思われる。

おや、どこからか香ばしいステーキの香りが漂ってきた。

さあ、一緒に昼食にしませんか？あの木陰のテーブルが良いですね。それでは、ブオナペティート！

## 事務局だより

### ブラジリアン・インターナショナル・プレスアワード2014年受賞!!

2014年9月26日曳舟文化センター（墨田区）で開催された「2014ブラジリアン・インターナショナル・プレスアワード」授賞式で、ABICは長年にわたる在日ブラジル人子どもへの支援活動などブラジル人コミュニティへの貢献を高く評価され表彰を受けました。

この賞は、ブラジルの知名度向上や文化・社会交流の発展に貢献した個人、団体、企業を表彰するもので、駐日ブラジル大使館、総領事館、在日ブラジル・メディアなどで組織された評議会がノミネートを行い、在日ブラジル人コミュニティの投票により受賞者が選ばれます。

今回は4回目であり、神奈川県、JICA、ABCジャパン、サッカーのラモス選手（現FC岐阜の監督）、その他アーティスト・スポーツ関係者など21の個人・団体が表彰されました。表彰式にはコヘア駐日ブラジル大使のご臨席を得て、約200人の関係者が参加し、表彰アーティストによる歌やカポエラなどが披露され賑やかに執り行われました。

ABICのブラジル関係活動については、在日ブラジル人子どもの支援を中心に、2005年から会員会社の三井物産(株)の在日ブラジル人子ども支援プロジェクトの実施業務を受託し、①2005年からブラジル人学校の生徒に対する教育資機材、奨学金の助成、②2007年に日本公立学校に通学する生徒のための副教材の作成、③2006年からは不登校・不就学生に対する、NPO・SABJAなどブラジル人への支援NPO・ボランティア団体などを通じての支援、④2009年からは毎年「外国人子ども教育支援セミナー（通称カエルプロジェクト）」開催などを実施しています。さらに、2009年から6年間文科省によるブラジル人子ども就学支援プロジェクト「虹の教室」の2教室運営業務を受託し、茨城県で実施しています。

今回の受賞は、これらの活動実績が高く評価されたものと大変喜ばしく光栄に存じます。今後とも、在日ブラジル人の子どもの支援のために最善の尽力を続けていく所存ですので、会員皆さまのご理解とご協力をお願いする次第です。



**Focus Brasil & Press Awards Japão 2014**  
（左から関伊知郎ABIC事務局長、コラレス副領事、齊藤秀久ABIC理事長、リリアン・テルミ・ハタノ近畿大学准教授、バターリャー等書記官、森和重ABIC中南米デスク担当コーディネーター）

## 会員の種類

種類	内容	年会費		
正会員	センターの活動を推進する個人、法人及び団体。 (理事会の承認を得て入会)	法人及び団体	1口	50,000円
		個人	1口	10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、並びに個人、法人及び団体。	法人及び団体	1口	10,000円
		個人	1口	5,000円
活動会員	センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。	不要	—	—

### 正会員

#### 団体・法人（17社）〈社名五十音順〉

〈10口〉 (一社)日本貿易会 伊藤忠商事(株) 住友商事(株) 双日(株) 豊田通商(株) 丸紅(株) 三井物産(株) 三菱商事(株)  
 〈4口〉 (株)日立ハイテクノロジーズ 〈2口〉 稲畑産業(株) 岩谷産業(株) 長瀬産業(株) 阪和興業(株)  
 〈1口〉 兼松(株) 興和(株) JFE商事(株) 蝶理(株)

#### 個人（11名）〈入会順・敬称略〉

池上 久雄 寺島 實郎 小島 順彦 宮原 賢次 吉田 靖男 岡 素之  
 佐々木 幹夫 勝俣 宣夫〈3口〉 小林 栄三 槍田 松瑩〈3口〉 市村 泰男

### 賛助会員

#### 法人（5社）〈社名五十音順〉

(有)イーコマース研究所 (株)エックス・エヌ 協同木材貿易(株) (一社)国際行政書士機構 NPO法人賛否両論

#### 個人（398名）

下記は2014年6月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。(敬称略・氏名五十音順)

〈3口〉 太田 弘之  
 〈1口〉 柘植 要介 西川 裕治 馬場 克彦 水野 伸二

活動会員 2,503名

(2014年10月末現在)

## 賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員及びその他の個人の方、  
 並びに法人及び団体の皆様のご入会をお願い申し上げます。

#### 会員入会のお問い合わせ・連絡先

#### 特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)

〒105-6123 東京都港区浜松町2-4-1 世界貿易センタービル23F

TEL : 03-3435-5973 FAX : 03-3435-5970 E-mail : mail@abic.or.jp